



Title	“Einsinnigkeit “とは何か : カフカの『城』をめぐって
Author(s)	藤井, ねり
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1985, 18, p. 21-35
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47764">https://hdl.handle.net/11094/47764</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# „Einsinnigkeit“ とは何か

—— カフカの『城』をめぐる ——

藤 井 ね り

## はじめに

述べられることすべてが主人公の意識によって媒介されていることを指す „Einsinnigkeit“<sup>(1)</sup> を、バイスナーがカフカの作品について初めて指摘して以来、この点に関してさまざまな研究が為されてきたが、作品との関わり合いにおいて Einsinnigkeit が持つ意味内容は、それぞれの研究により相違を見せている。本稿ではバイスナーをも含めて Einsinnigkeit に関する幾つかの研究を概観して、その主要な問題点を明らかにしたい。そうすることにより、Einsinnigkeit が語りの単なる技法上の特質ではなく、語りの内部構造そのものをも規定する重要な要素であることを示すのが、本稿の意図である。なお、論文に与えられた制限上、ロマン 『城』<sup>(2)</sup> については、作品全体の解釈というよりむしろ作品の読み方の一つの可能性を示すにとどめた。

## I Einsinnigkeit の意味と問題点

バイスナーは『物語作家としてのカフカ』の中で、「語り手は主人公と一体であるばかりでなく [.....] 語られる事柄とも一体である」<sup>(3)</sup>、あるいは、「カフカは [.....] 自分自身だけでなく読者をも主人公に変える」<sup>(4)</sup> と述べている。この考え方によれば、語り手＝主人公、カフカ＝主人公ということになる。つまりバイスナーの意味する Einsinnigkeit とは、語り手、主

人公、カフカの三者が一分のずれもなく重なり合うイデンティテートの関係に他ならない。「内面世界」がカフカの物語の対象であり、語り手は主人公の魂の中にしか存在の場を得ることができないと、バイスナーは述べる。そして彼はこの物語の対象としての「内面世界」、あるいは主人公の魂と、カフカの日記の言葉「夢のような内面生活」を以下のように結び付けてカフカの語りの説明としている。「カフカは自らの夢のような内面生活について語ることによって、自身の芸術の本質を簡単な公式に表わした。夢のような内面生活の表現、これは実際に彼の語りなのだ。」<sup>(5)</sup> バイスナーの言うように主人公の魂の中に語り手の視点があり、よって主人公の「内面生活」が「内部から」語られるのであり、それがカフカにとって「夢のような内面生活」を描くことを意味するというのならば、カフカという生身の作者個人の内面＝カフカの物語の虚構世界ということになってしまう。<sup>(6)</sup> ここでバイスナーが犯している重大な誤りは何だろうか。それは、彼が作者個人の属する現実世界のレベルとテキストのそれとを混同してしまっているということである。

ヴァルザーは『ある形式の記述』において、Einsinnigkeit が作者カフカと主人公とのイデンティテートと混同されるのを恐れて「一致」(Kon-  
gruenz)<sup>(7)</sup> という言葉を用いている。しかし、主人公Kと語り手との「全的  
一致」<sup>(8)</sup> を主張する彼が、カフカの作品においては「語り手が欠けている」<sup>(9)</sup>、  
「美学的事実としての語りそのものは、ここでは作品の現象分野に含まれ  
ない」<sup>(10)</sup> として作品に主人公の単一的パースペクティヴの存在しか認めてい  
ないことにおいては、Einsinnigkeit の捉え方に関する限り基本的にはバ  
イスナーの主張と何ら変わるところがない。バイスナーもヴァルザーも、  
カフカの作品においてはKの判断がすべてだと主張する。Kが見たり聞い  
たりして伝えることが、作品の世界そのものを形成しており、その世界の  
理解のみに重点が置かれているのだ。それ故、読者はKに変わるとされ、<sup>(11)</sup>  
読者とKとの間には裂け目が生じないとされる。<sup>(12)</sup> 彼らにとって Einsinnig-

keitとは文字通り、虚構の世界の「一義性」を意味するのである。

これに対してフィリピは、<sup>(13)</sup>Kとは重ならぬ無謬 (auktorial) の語り手の存在を主張する。すなわち、Kのパースペクティブからは独立した外的な世界が「まず彼の意識界の外部に存在」<sup>(14)</sup>しており、それをKが体験しながら自らの意識の中に取り入れてゆくことによって、Kの内的な世界が作られてゆくというのだ。無謬の語り手がその権利を保持するとされる「純粹に『事實的』な報告と叙述」<sup>(15)</sup>が示されるのは、K以外の登場人物から発する単純な行動や、彼らがKと行なう対話においてであるという。しかし、「[.....] 直接話法の会話が変更を受けることなく『伝達される』と見なされ得る場合でさえ、やはりパースペクティブを担う人物が会話を取り上げる際の選択のし方及び意識性の度合いは未知のままなのである。同じことが人物の行動と事物の現有についても言える。」<sup>(16)</sup> 故に、それらの記述がパースペクティブの点で中立的なものであり、純粹に「事實的」だとは決して言えないのである。

また、作品の任意の箇所に関して、何をもって「まず彼の意識界の外部に存在」している外的な世界とするのかも大いに疑問である。このことは『城』の冒頭部分について考えてみれば明らかであろう。

Kが到着したのは、晩遅くであった。村は深い雪の中に横たわっていた。城山は少しも見えず、霧と闇がその周りを取り巻いており、大きな城のありかをほのめかすほんの微かな明かりさえなかった。長い間Kは、国道から村へ通じる木橋の上にとたずみ、何も無いように見える虚空を見上げていた。(7)

一見、ここで語っているのは、物語の中で起こることすべてを知り尽くした無謬の語り手のようである。なぜなら、ここでは目下のところKの目には見えない「城山」について語られているのであり、しかもその「城山」

は「大きな」と形容されているからである。「何もないように見える」という言葉も、Kには見えていないがそこに「大きな城山」があることを知っている無謬の語り手に発する言葉のように思われる。

しかし一方、Kはここへ来る前に既に「大きな城山」があることを知っていたのだとももちろん考えられるわけである。とすれば、今は見えない「大きな城山」について語るのも、また目の前の霧と闇の世界を「何もないように見える」と形容するのもKだということができる。

この「多義性」<sup>(17)</sup>に関して重要なことは、物語の虚構の世界における外的現実が定め難いことである。見えない「城」、あるいは「城山」があることは、すなわち見えない「城山」について語るのが語り手だとすることに等しい。なぜなら、Kが語っているのだとすれば、Kはそこに「城」または「城山」が存在しているはずだとただ自ら思い込んでいるだけかもしれないからである。その場合には、「城」が外的現実として存在するかどうかは決められない問題なのだ。「城」が「霧と闇」の背後に存在しているか否か、ここでは言われていない。

このように考えるならば、「村」というのもそれほど確かな概念ではない。この雪にうずもれた「村」について語るのがKならば、「村」というのはKに発する概念であって、外的現実としてKの前にあるものがKの言う「村」と同一かどうかは決められない。しかも、「城」にも「村」にも名前がなく個別化されない。だから、Kが「城」、「村」と眼前のものを呼ぶとき、Kの目の前に実在しているものと、Kの名付ける「城」や「村」が一致しているとは言えないのである。明らかに語り手によって語られていると受け取ることでできる「城」という言葉が見出されて初めて「城」の存在が証明できるのだが、こういう「城」という言葉はどこにも見出されない。なぜなら、Kにはその時点で知り得ないことが語られていても、「城」に関する限りKの予備知識または彼の思い込みによってすべてが説明されてしまうからである。

このように、読み手はむしろ最初からKのパースペクティブを通してKの作り出す現実と直面し、雪にうずもれた「村」と、その上にそびえる「城」を眺めているのかもしれないのである。語られていることがKの主観的な知覚に過ぎないという可能性は、作品のあらゆる箇所にも有効なものであり、フィリピの主張する「Kの遭遇するものの純粋な事実性」<sup>(18)</sup>はどこにも認めることができない。むしろ読み手は、霧のように作品をおおうKのパースペクティブをつねに感じ取らざるを得ないのである。

しかしここで注意すべき重要な点は、Kのパースペクティブから語られることを読者がすべて無批判的に受け入れてしまってはならないということだ。「解釈者は、さまなければテキストの特質を捉え損なうから、主人公のものの見方に没頭しなければならない。しかも極端な先入観に縛られた主体によって媒介される事柄に対して、決して敏活な疑いの念を失ってはならないのだ。」<sup>(19)</sup> 外的現実をKのパースペクティブから逆算することは不可能である。なぜなら、さきほど確認したように、物語の中ではKのパースペクティブによって既に屈折を経た現実像しか提示されないからである。しかしながら、Kの見方そして考え方を丹念に「疑いの念」を抱きつつ追ってゆくと、読み手は、Kの作り出した内的現実と作品中の虚構の世界との間に明らかな矛盾、あるいは不一致を読み取ることができる。こういった亀裂が『城』においてどのように表われるのかを次節に示すことにする。

## II 『城』における Einsinnigkeit の現象

Kは自分でも不思議に思ったほど、村長との会談についてほとんど心配していなかった。これまでの経験によると、伯爵の役所との職務上の交渉は、彼にとってきわめて簡単なものであった。彼は会談が気にかからないことを、そのことによって説明しようとした。それは一方では、彼

の件の取り扱いに関して、確定的な、外面的には彼に非常に好都合な原則が明らかに決定的に打ち出されてしまったからであり、他方では、役所の仕事の驚嘆すべき統一性のためでもあった。その統一性は、存在していないように見えるところで、とりわけ申し分のないものと感じられた。[.....]役所との直接交渉は、ひどくむずかしいというものではなかった。(92)

「役所との直接交渉」とKは言うのだが、そういうものがKと役所との間にあったのかどうか、またそもそも『城』全編を通じてあり得るのかどうか、まず電話から考察してみよう。

Kが到着した夜、シュヴァルツァーはKの主張に関して問い合わせの電話をするが、彼は城に電話するとはひとことも言わない。Kの目の前で起こるべき事は、シュヴァルツァーがどこかに電話をするということだけだ。Kは彼が電話をしているのを聞いているだけであって、相手が誰であり、何を言っているのかも直接知ることにはできない。

「電話で問い合わせしてみよう。」「.....」そして今、電話で話が始まった。執事は眠っていたが、幾人かいる下級執事の一人のフリッツ氏とかいう人がそこに居合わせた。(10 f.)

執事が眠っており、何人か居る下級執事の一人、フリッツ氏が電話に出たというのは、Kが直接目にするべき事ではなくて、電話の向こう側で起こる事柄である。つまり、これはKが自らの思考によって作り出している現実なのである。シュヴァルツァーの口振りから、そして彼が「フリッツ氏」と相手に言うのを耳にして、Kは電話の相手がフリッツという下級執事だと思いに過ぎないのだ。Kの知覚はこのようにして見せかけの統一のパースペクティブを形成してゆくのである。

しばらくして電話のベルが鳴る。これがフリッツからだとしてわかるのだろう。Kはただ、シュヴァルツァーが怒って受話器を投げ出すのを目にするだけなのだ。なるほどシュヴァルツァーは、「土地測量師なんて話はあるものか」(12)と叫ぶ。しかし、シュヴァルツァーに電話で誰が何と言ったのかは、Kにはわからないのである。二度目にかかってくる電話にしても、同じことが言える。

彼はそこでかなり長い説明を聞き取っていたが、やがて低い声で言った。「それじゃあ、間違いなんですね。[.....] 変です、変ですね。土地測量師さんに、なんて説明したらいいんでしょう。」Kは、聞き耳を立てていた。それでは、城はKを土地測量師に任命したのだ。(12)

Kは直接電話に出していない。シュヴァルツァーがこのように話すのを聞いて、土地測量師に任命されたと思うだけなのである。

翌日Kは自ら電話に出る。この電話は助手がかけたもので、相手が城の執事だとはどこにも書かれていない。

二人は電話機の所へ走って行った。電話がつながった [.....] (35)

シュヴァルツァーも助手も、どこに電話をかけたとも相手が誰だとも言わない。電話という手段を使う以上交渉は間接的なものであり、相手が本当に城なのか、たとえ城であってもその城の誰なのかは、わからないのである。ところがKは後に、村長に次のように語る。「そこでその男は、電話でフリッツ氏という下級執事に問い合わせ、私が土地測量師として採用されたという知らせを受け取ったのです。」(115)しかし電話から判断する限り、城がKを土地測量師に任命したとは言えない。城はKに対して直接的な何の態度も示していない。いや電話の相手が城かどうかさえ確

定できないのである。

次にKが受け取る二通の手紙について考えてみよう。第一通目の手紙には、署名の傍らに「X官房長官」(40)と記されている。署名があるのだが、Kはそれを読むことができない。グラムと読むのだと教えるのは、バルナバスである。だから、この手紙が本当にグラムの手になるものかどうかは、わからない。しかも、この手紙には宛名が書かれていない。

拝啓。ご存知のように、あなたは領主にお仕えする職務に採用されました。(40)

故に、この手紙がKに宛てられたものかどうか、やはりわからないのである。そして、ここには「領主にお仕えする職務」と書かれているだけで、「土地測量師」として採用されたとは書かれていない。「ご存知のように」という「この三語は、彼の良心を不安にする。なぜなら、これらの言葉は将来のあらゆる発展に対する責任を彼自身に突き返すからだ。この手紙は彼を歓迎しているのではなく、彼の雇用を裏書きするものでもない。これはただ、彼の到着を映しているだけである。」<sup>(20)</sup>一通目の手紙に関しては、この手紙がグラムから来たものとも言えないのであり、Kを土地測量師として任命したと伝えているとも言えないのである。

第二通目の手紙は、村長宅の訪問以後に受け取るものであるが、これに関しても同じことが言える。この手紙には宛名があり、「橋荘宿泊中の土地測量師殿」(187)となっている。これはいったい誰のことなのだろうか。Kはこの時既に橋荘から追い出されてしまっている。これだけの宛名では、この手紙がKに宛てられたものとは言えない。「土地測量師」も「城」と同じく普通名詞であり、個別化されない。そして、この手紙がグラムからだKに告げるのはバルナバスであって、本当にグラムがこの手紙を書いたのかどうかは、やはりわからないのである。

城の役人について考えてみると、Kは秘書には会えても役人には一度も会うことができない。姿を見かけることさえ彼にはできないのである。グラムを見たときKは思っているが、覗き穴からKが見た男がグラムだとはテキストでは言われていない。グラムだと主張するのは、フリーダなのである。グラムを含め、役人達は非常に神経質なのでKの前に姿を現わさないとされている。<sup>(21)</sup>この神経質という「ひとつの表現要素」<sup>(22)</sup>によって、あくまでKに対する城の間接性が維持されているのだ。

Kは、電話や手紙の相手が城だと信じている。そして彼は、自分が城と「直接交渉」<sup>(23)</sup>をしていると思い込んでいる。しかし、電話や手紙という手段に頼る以上、その交渉は間接的なものであり、間接的である以上相手が本当に城なのかどうかは確定できないのである。電話と手紙に関する限り、Kの言う「直接交渉」など存在しない。それはKの思い込みに過ぎないのだ。

それでは、Kの言う「役所の仕事の驚嘆すべき統一性」は、どのようなところに表われているのだろうか。

「こちらは、土地測量師さんの助手です。」「どの助手ですか。どの人のですか。どの土地測量師ですか。」Kの頭に、昨日の電話の会話が浮かんだ。「フリッツにきいて下さい」と、彼は手短かに言った。彼自身も驚いたことに、これが効を奏した。しかし、これが効いたこと以上に、彼は城の仕事の統一性に驚いてしまった。返事はこうだった。「もう知っています。永遠の土地測量師ですね。[.....]」 (37)

Kがフリッツという名前を口にすると、すぐに「永遠の土地測量師」という答えが返ってくる。一見、相手は誰が電話をしているのか知っているかのように見える。しかし、この電話の応答は「城がKの目前に据える音響反鏡」<sup>(24)</sup>によるものであって、「訝」<sup>(25)</sup>とも言うべきものである。Kの耳にする

音は、Kの言うことに対する本当の返答ではない。

Kが「役所の仕事の統一性」と解釈するものは、実は機械的とも言える「反射」作用に過ぎないのであるが、こういった「反射」作用は、至るところに見出される。Kは村のどこへ行っても、「土地測量師」と呼ばれる。しかし、そう呼ばれるというだけのことであって、彼らがそう呼ぶことにどういう意味を付しているのかは、わからない。

「私は伯爵の土地測量師です」とKは言って、依然として姿の見えない者に向かって弁明しようとした。「ああ、土地測量師なのね」と言う一人の女の声がした。すると今度は、完全な沈黙が訪れた。(22)

人々はKを「土地測量師」と呼ぶ。しかし、だからと言ってそれは、彼を「土地測量師」として認めるということの意味するのではない。村長はKを「土地測量師」と呼びながら、それを認めようとはしない。彼はKに小使いの仕事を与えるのである。Kが「土地測量師」と呼ばれるのは、Kの口にする「土地測量師」という言葉が「訝」のようにKに返ってくるというだけのことである。Kは自ら「土地測量師」と名乗ったのであり、それだからこそ彼はそう呼ばれるに過ぎないのだ。

Kが「城の仕事の統一性」と呼ぶものは、実は彼が村で耳にする「訝」であり、鏡に映った映像なのである。「それ故、Kにはそのようなものに見えざるを得ないにしても、クラムの手紙は『矛盾』でもないし、また『誤解』でもない。それらは冒頭において彼が宿屋で口にした『私が土地測量師であることは言わせていただこう』という言葉の歪んだ反響に過ぎないのである。」<sup>(26)</sup> Kはそれまで測量の仕事など全くしていないにもかかわらず、第二通目の手紙には、「あなたがこれまでに遂行された測量の仕事を私は評価致します」(187)と書かれていたのである。これは「矛盾」でも「誤解」でもないのだ。Kのところに名乗り出てくる助手達も、電話や手紙と同じ

く「反射」作用の一つに過ぎない。「私の助手は、明日器材を車に載せて追って来るのだ」(9)とKが言ったことに対する「反射」なのである。

こういった「反射」作用は、Kにさし向けられる「使者」バルナバスにも見出される。バルナバスは「使者」だと名乗るが、これはKが自らを「土地測量師」だと言うのと同じことである。なぜなら、バルナバスは決して城から「使者」に任命されたりしたわけではなく、それはアマーリアのところに来た使者の侮辱を償うための「見せかけの城の勤め」(357)だからである。Kがやって来たからこそ、バルナバスは手紙を運ぶ仕事を得ることができた。Kが本当に城の「土地測量師」であるならば、バルナバスも城の「使者」であるということになるのである。故にバルナバスはKを頼りとし、Kに手紙を運ぶことによって本当に自分が城に「使者」として採用されたのかどうか確かめようとする。一方KはKで、「クラムから」の手紙をもたらすバルナバスを頼りにしている。結局、二人が互いにもう一方が自分を城へ導いてくれるものと思っているわけである。この二人はしかし、お互いに鏡に映る自らの像を眺め合っているようなものなのである。

「伯爵に呼ばれた土地測量師」だというKの主張に対して助手が名乗り出、使者がやって来、Kはどこへ行っても「土地測量師」と呼ばれる。しかし、これらはKの主張に対する単なる機械的な「反射」作用であり、Kを「土地測量師」として認めるといふいかなる城の意志も態度も確認できないのである。Kはしかし、これらの現象に「城の仕事の統一性」を感じ取っているのだ。

以上でもわかるように、Kの言うような「役所との直接交渉」は電話にも手紙にも認められない。しかも電話や手紙の相手が城なのかどうかすらもわからない。Kが土地測量師に任命されたとは、作品は言っていない。また、「役所の仕事の驚嘆すべき統一性」も、どこにも見うけられない。結局これまでの観察で明らかになったことは、城が姿を見せないということである。ここには城に向かってのKの戦いのみがあり、相手の城の姿を認

めることはできないのだ。

しかし、「Kの眼前にあるのは、冷静に判断するかぎり、ありふれた一寒村にすぎない」と言うのは、言い過ぎであろう。城そのものは姿を現わさない。が、存在しないとは言われていないのだ。到着の夜にシュヴァルツァーが受け取った電話の後、Kが誰からも「滞在許可」(8)の提示を求められなくなるのは事実であり、宿屋のまかない費もすべて城が支払うとされる。<sup>(27)</sup>橋荘を追い出されれば、Kには小使の職と教室という滞り場所が与えられるのである。城そのものは姿を現わさない。しかし、Kや村人達があらゆる面にわたって城に規定されていることにおいて、読者は城の存在を感じ取ることができるのだ。

## 結 び

シュタンツェルは、「一人称ロマン」から「登場人物的ロマン」への移行は次のように起こるとしている。つまり、「一人称ロマン」における語り手としての私より、体験しつつある私の方に重点が置かれることによって、体験時そのものにおける一人称の内面が露呈し、体験しつつある私は、あたかも登場人物の一人であるかのように現象するのである。<sup>(28)</sup>(圏点筆者) この二つの形式の境界区域は、ただ人称を転換するだけで「一人称ロマン」を「登場人物的ロマン」にすることができる地点だというシュタンツェルの観察に基いて、コーンは、『城』についてカフカの踏んだ手続きがシュタンツェルの述べる人称の転換であったことを確認している。<sup>(29)</sup>

『城』の語り手は、体験しつつあるKの中に非常に巧妙に身を潜めている。Kは、見たり、聞いたり、感じたりしつつそこに居合わせることによって、密かに語り手の役目を引き受けているのだ。カイザーは、ロマンの語り手を「全知の神もしくは神々」に相当すると見なしているが、『城』の語り手にはもはやこの定義は当てはまらない。この語り手は、「同時に二つの場所に存在し、同時に二つの時間秩序の中に生きる」ことはできない<sup>(30)</sup>

のである。

しかし、バイスナーが主張するように、Kのパースペクティヴによって作り出されるKの内的現実層がそのまま作品の世界を形成しているのではない。KにとってはKの意識がすべてであり、Kのパースペクティヴによって作り出される世界しかなく、彼自身の価値判断基準しか存在しないのだが、読み手にとってはKの内的世界がすべてではないのだ。バイスナー<sup>(33)</sup>の言う「統一的な視野」は見せかけに過ぎない。前節でも確認したように、読み手とKとの間、そして語られることとKの間には裂け目が生じるのだ。あらゆるものがKというレンズを通して伝達され、読み手はそのレンズの屈折を経た像しか受け取ることはできないけれども、「主人公がぶつかる抵抗、そして彼が体験する拘束において、彼の外部にリアリテートが存在することが認識できる。しかしこのリアリテートそのものがどういうものなのかは決定できない<sup>(34)</sup>」のである。客観的価値判断基準としてはっきりと姿を現わす語り手が欠けているために、Kはドン・キホーテのように極端には戯画化されない。しかし、読み手は、Kと外界との間に生ずるこのKの目には映らない亀裂に気付くため、Kをおかしな人物と感ずるのであり、また、それ故決してKに感情移入することができないのである。

Einsinnigkeit を理解することは、主人公の意識や知覚により作品の中に形成される主人公の内的現実のみならず、主人公と外界との間の亀裂を確認することをも意味するのである。Einsinnigkeit をこのように理解して初めて、読み手はこの特質を作品解釈の手がかりとすることができるのだ。

## 注

- (1) Friedrich Beißner: *Der Erzähler Franz Kafka*. Stuttgart 1952.

普通「視点の一貫性」などと訳されるが、本稿における Einsinnigkeit はバイスナーの意味した Einsinnigkeit そのものではなく、それをめぐるさまざまな現象をも含めたもっと広い意味を持っているので、敢えて訳さず原語の

まま使うこととした。

- (2) Franz Kafka: *Das Schloß*. Hg.v. Malcom Pasley. Frankfurt a. M. 1982. 以下『城』からの引用は本文中に頁数のみを記す。
- (3) Beißner: a. a. O., S. 34.
- (4) Ebd., S. 36.
- (5) Ebd., S. 30.
- (6) Vgl. Herbert Kraft: *Kafka. Wirklichkeit und Perspektive*. Bebenhausen 1972, S. 22.
- (7) Vgl. Martin Walser: *Beschreibung einer Form. Versuch über Franz Kafka*. Ullstein Buch Nr. 2878, München 1978, S. 105 (A. 9).
- (8) Ebd., S. 20.
- (9) Ebd., S. 16.
- (10) Ebd., S. 15.
- (11) Beißner: a. a. O., S. 36.
- (12) Vgl. Walser: a. a. O., S. 26. ヴァルザーは、語り手とKとの全的一致のためにロマン全体はイロニー化されず、Kも戯画化されないとしている。
- (13) Klaus-Peter Philippi: *Reflexion und Wirklichkeit. Untersuchungen zu Kafkas Roman „Das Schloß“*. Tübingen 1966, S. 20 ff.
- (14) Ebd., S. 20.
- (15) Ebd., S. 23.
- (16) Kraft: a. a. O., S. 12 f.
- (17) Winfried Kudszus: *Erzählhaltung und Zeitverschiebung*. In: *Franz Kafka. Wege der Forschung*. Bd. CCCXXII. Darmstadt 1973, S. 332.
- (18) Philippi: a. a. O., S. 23.
- (19) Jörgen Kobs: *Kafka. Untersuchungen zu Bewußtsein und Sprache seiner Gestalten*. Hg. v. Ursula Brech. Bad Homburg 1970, S. 44.
- (20) Heinz Politzer: *Franz Kafka. Der Künstler*. Frankfurt a. M. 1965, S. 341.
- (21) Kafka: a. a. O., S. 172, S. 411.
- (22) Walser: a. a. O., S. 51.
- (23) 本論文11頁。
- (24) Politzer: a. a. O., S. 354.
- (25) Ebd., S. 349.
- (26) Politzer: a. a. O., S. 354.
- (27) マルト・ロベール 『古きものと新しきもの』 城山良彦、島利雄、円子千代訳。1973年 叢書ユニベルシタス 229頁。
- (28) Kafka: a. a. O., S. 13.

- (29) Franz K. Stanzel: *Typische Formen des Romans*. Göttingen 1964, S. 37 f.
- (30) Dorrit Cohn: K. Enters the Castle. On the Change of Person in Kafka's Manuscript. In: *Euphorion* 62, 1968, H. 1, S. 41 f.
- (31) Wolfgang Kayser: Wer erzählt den Roman? In: *Die Vortragsreise*. Studien zur Literatur. Bern 1958, S. 98.
- (32) Ebd., S. 96.
- (33) Beißner: a. a. O., S. 32.
- (34) Kraft: a. a. O., S. 13.